「旅する文学-紀行文学で巡る埼玉-展」を見て

上原 昇（2 組）

今年は、明治４年（1871）１１月１４日（県民の日）に埼玉県が誕生して１５０周年になる。ただし、現在の県域となるのは、その後明治９年とのことである。
筆者も埼玉（さいたま市）に居を構えて約４０年、すっかり埼玉県民となった。
同期の埼玉県在住者は名簿を見る限り、ざっと４０名近くを数えることができる。
現在、桶川市の「さいたま文学館」では１５０周年を記念して、近代紀行文学を通して埼玉県内の名所旧跡および風情を紹介する企画展『**旅する文学-紀行文学で巡る埼玉**』を開催中である。（１１月２８日まで）
同期有志による「蕨の会」では、これまで多くの埼玉県の名所旧跡を訪ねてきた。
本企画展でも、我々が歩いた場所が紹介されているので、興味を持って１１月１３日（土）の午後、会場を訪れて、展示品の鑑賞と講演会に出席した。
展示内容は、明治から昭和初期における著名な作家・歌人・俳人７名（田山花袋、幸田露伴、大町桂月、与謝野晶子、若山牧水、高浜虚子、水原秋櫻子）の紀行文・短歌・俳句などを通し、当時の埼玉の魅力を紹介している。
【近代作家による主な紀行文学】
　田山花袋：『大宮公園』、幸田露伴：『知々夫（ちちぶ）紀行』、大町桂月：『春の郊外』
【近代歌人による主な吟行】
　与謝野晶子：『比企の渓（たに）』（歌誌「冬柏」）
　　《槻の川 比企判官の地を選び われ五月雨を聞く如きかな》晶子
　若山牧水：『秩父の秋』（「渓谷集」）
【近代俳人が詠った風情】
　高浜虚子：『妻沼（めぬま）』（「ホトトギス」）《桑の芽に沈みて低き藁家かな》虚子
　水原秋櫻子：『古利根川の岸辺』（「ホトトギス」）

当日の講演会は『近代の紀行文学で味わう埼玉の風物』という演題で当館学芸員から、露伴の秩父紀行、桂月の越谷桃林紀行、晶子の嵐山渓谷（菅谷）吟行、虚子の妻沼吟行作品の紹介と原文の朗読があった。
越谷を除くと、いずれも「蕨の会」で踏破した場所である。
最近、発表された令和３年都道府県魅力度ランキング（ブランド総合研究所による）では、何故か４７位中４５位と低位にランキングされている埼玉県ではあるが、今では川口市やさいたま市は東京都埼玉区といった感もある。
現在放映中の大河ドラマ『青天を衝け』（深谷市が主人公渋沢栄一の生地）や映画『翔んで埼玉』なども話題を呼んで、ダサイタマから脱皮（逆襲）を図る埼玉である。

企画展会場入り口

展示されていた昔の大宮氷川公園の絵葉書

（21 年 11 月 13 日記）